

11章・闇から光へ：HELEN KELLER (1929-68)

— *from darkness into light, ...to friendship, companionship, knowledge, love.*

第1節 (My) first meeting persons who interested me (in a book or something)



ヘレンケラー (Helen Adams Keller) はシュバイツァー {Albert Schweitzer (1875年1月14日 - 1965年9月4日)} とともに、私がこの短大に来たときに最初のテキストにした人物である。ヘレンケラーは、周知の如く耳が聞こえず、目が見えず、ものがいえなかったにもかかわらず、後には数箇国語をマスターし、そしてその生涯を恵まれぬ人達に捧げた。だから、この第Ⅲ部のテーマの条件としては最適の人物である。

それは彼女が困難を抱えていたにもかかわらず何箇国語もマスターしたからではなく、言葉の存在を知らずに荒れ狂っていたヘレンケラー{第3節① 参照}が、言葉の存在を知ってから、自分の大切にしていたセーターを幼いときに人にあげるようになったことに示されている。たかがセーターではない。数箇国語をマスターすることよりもはるかにこのことの方が重要である。その意味は、このテーマが終わる頃には幾分理解してもらえるであろうし、あなたがヘレンの親ならば同様のことを思うであろう。特に、彼女の荒れている状態を見ていたならば。しかし同様のことはヘレン以外にも言えるのではなかろうか。{このセーターの話は第4節参照}。

まさに、ここに人間になる上での学ぶことの重要性が示されている。また、ここに私が目指そうと考え始めた英語の授業のヒントがある。同時に、言葉だけではなく人間になるためには不可欠であり、学ばなければならないことは何かを第3節① ～ ⑤ を読み、尚かつ第4節を参照に考えてもらいたい。

《◇－１：ヘレンケラーとの出会い》

ヘレン・ケラーの名前をいつ知ったのかは覚えていない。だから、ヘレン・ケラーとの最初の出会いは、この短大の創設時の１９８３年度に、シュバイツァーの『My childhood and youth』とともに『Helen Keller』を最初のテキストにしたときであるかもしれない。しかし、何故ヘレンケラーをテキストにしたのかは——今でも思い出せないのだが——たまたまそこにこの本『Helen Keller』（＊６）があったからであるにすぎなかったのかもしれない。あるいは、既に無意識のうちに今回の第Ⅲ部のような構想が潜在的にあったのかもしれない。

しかし、８章で書いたように、ヘレンケラーのこのテキストはシュバイツァーのテキストと異なり、文が短いので説明することもなく、授業をする上でどうにもこうにもまいていたことを思い出す。当時の私は幾つかの専門書のたぐいより、こうした初歩的な英語のテキストの方が教えづらかったのである。また、この短大１期（８３－８７年）は第Ⅱ部の５章、６章、７章に記したように駿台で全力をあげていた時期のため、十分な時間が割けず悔いを残した時期でもある。そのため、「Snowman」の訳で大恥をかいたことや発音で苦労したことも８章シュバイツァーの箇所ですべての通りである。

こうした時間的制約のもとで、全く手の出しようがなかったものの、『ムッチャン』（＊２３）を印刷して配付したり、ヘレンケラーのビデオ『Miracle Worker』を海外発注したりしたのもこの時期のことである。

その後、さらに悪いことに政経・英語・日本史の授業に付け加え、相当数の模試作成という超多忙な時期を迎え、おまけに駿台でのつまらぬトラブルにより精神的にも限界を迎え、その影響で短大の授業は不毛期（８６－８８年）となる。

やがて、駿台を辞め、９章のキング、１０章のチャップリンなどに取り組み始めるなど、始めて英語も求める日々が始まる短大２期（８８－８９年）となる。しかし、８９年末の入院を契機に病的に一切の気力が全くなくなる休眠期を迎えてしまったことなどは、既に１０章のチャップリンの箇所などに記した通りである。この間の授業のことは何も記憶になく、生徒のこともほとんど覚えていないという異常な時期である。全く“無”の時期である。尤も、それでも授業のヒントの幾つかと出合ったことも１０章ですべての通りである。

それではその後どうなったか、短大３期（９４年から）のことを以下記す。

《◇－２：短大第３期の始まり（１９９４年から）、再々出発とアン・サリバン》

９３年末より、突如^{よみがえ}気力が蘇り、再度英語の授業にも取り組む日々が復活する。そして、このときに次年度（９４年度）からの教材に、私が今までに影響を受けた人物の言葉の英文を集めテキストを作成することを思いついた。（９４年度前期テキスト『人間であるために』、９５年度より大幅補足改訂『求め続けて』のこと）。

その中のテーマの一つとしてヘレンケラーも入れた。だが、本当はヘレンケラーをテーマにしたかったのではなくて、彼女の師アン・サリバン（Anne Sullivan、または Annie Sullivan Macy、Johanna Mansfield Sullivan Macy、1866年4月14日 - 1936年10月20日）を取り上げたかったのである。というのは、先に記したビデオ『Miracle Worker』（「奇跡の人」）の中でのアン・サリバンの存在に大きな興味を以前から持っていたからである。

それは、この『Miracle Worker』の中で、字の存在すら知らず、感情の赴^{おもむ}くままに行動するヘレン・ケラーに、言葉の存在を教えるため、文字通り格闘するサリバンの姿である。目も見えず、耳も聞こえず、ものも言えないヘレン・ケラーは、後に「ドイツ語、フランス語、ラテン語、

英語、ギリシア語」を学び、また指文字・点字を覚え、さらには口頭でも話す訓練もして話すことができるようになる。まさに『奇跡の人』となっていた。そして、そこにおけるサリバンの存在に注目してもらいたかった。

尤も、私は幾つかの語学に精通したということは何の意味もないように思う。語学に精通したということよりも、語学を学ぶことで何を得たのか、そして学んだことにより何をしたのかが重要であると思う。ヘレンケラーにはそれがあった。

ここに私の目指そうと思う語学教育の一つのヒントがある。詳細第4節参照。だが、そのヘレン・ケラーに、映画『Miracle Worker』に見るように文字通り格闘し、字の存在を教えたのは、何度も言うようにサリバンであった。しかも、彼女は彼女自身も目が悪く、14才まで文字が読めなかったのである。その彼女が大学までヘレンケラーに付き添い、講義の内容を指文字で綴っていた。彼女自身も相当勉強しなければならなかったと思われる。晩年彼女は自分が失明する危険がありながらもヘレンのために本を読み、そして、ヘレンにその内容を伝え続けた。

私にとって『Miracle Worker (奇跡の仕事師)』とは、まさにサリバンであった。私が教育に携わっているだけに「Miracle Worker」はサリバンで、「Miracle Teacher」であり、「Miracle Mother」であった。親が子にものを教えるのも同様である。そして、第4節の補足説明で述べるが、文字・言葉を学ぶとは「心を」、あるいは「心を通して」学ばなければ、その意味はいかほどのものであろうか。文字・言葉は単なる道具ではないように思う。そのことをヘレン・ケラーとサリバンを通じて今痛感している。

ヘレン・ケラーについて読んだ人なら、サリバンが言葉を「心を通して」教えたということに異存を挟む人はいないであろう。しかし、こうしたきれいごとや理屈よりも私が引かれる何かが当時からサリバンにはあった。だから、94年度から再度本格的に授業に取り組んでみようと考えると同時に、サリバンをテーマにしなければこの授業は成り立たないと思い、資料収集を開始した。だが、思うように資料が入手できず、サリバンの資料にいたってはほとんど入手できず、94年度はこのテーマは断念しようかと迷ってしまった。

しかし、念のため他の幾つものテーマと並行でヘレンケラーの資料を読んでいくうちに、怪我が功名とでも言うべき、ヘレンケラーの中に幾つかのテーマを見いだすことができ、今回の教材を『求め続けて』に載せることができただけでなく、それらはこれから述べるように第Ⅲ部の内容に不可欠なものとなっていた。

《◇－3：ヘレンケラー再発見》

94年度は、迷いつつ、その年の前期教材のテーマ候補二十幾つかの資料収集やその検討と並行し、ヘレン・ケラーに関する文献を読んでいた。その内に、先に述べたようにヘレンケラーは第Ⅲ部に欠かせないと考えるようになってきた。それはヘレンケラーの中に次の二つの内容を発見したからである。

一つはMy favorite words ① ② ③に見られるヘレンケラーが言葉を学ぶ内に「心」を得ていったことである。{第4節の◆－1のセーターの話も参照}。もう一つはヘレンケラーの『Three days to see』に巡り会えたことは思わぬ幸運であった。(My favorite words ⑥とその後の「◆その他——自然の息吹」の箇所参照。一部口頭解説)。特に、後者はFieldwork「鑑真」の際に大きな意味を持つことになる。(後期教材『旅に心を求めて』の12章「鑑真和上に想う」の箇所参照)。

さらに、これはその後のFieldworkの内容に質的な変化をもたらすことにもなった。自然との対話等である。同時に新たな一眼レフカメラの導入がこれを一層促すことになったが、これらも

前期教材か後期教材のどこかで触れる予定である。そこで、この「Three days to see」は是非読んでもらいたいので、95年度より「◆その他——自然の息吹」として、さらに一定の英文を収録した。詳細な解説は授業で行うが、ここからも数年間は前期試験に出題する予定でいる。それほど私にとって大きな影響を与えた文の一つである。

《◇－4：第Ⅲ部HEART（授業に‘心’を求めて）について》

授業の導きの糸、‘心’との出会いがあったのも、この94年度であった。（詳細は補章－3参照）。

それは、英文聖書の資料集めをしているときに、岡山クリスチャンセンター（現美作市湯郷）で、ある外国人牧師さんより聖書を無料で頂いたことに始まる。このとき、最低限必要なことは英語で話せたものの、私がそれをどのくらい必要としていたか、そしてそれを入手でき、それ以上に無料で頂いたことや、牧師さんの親切な態度に対して私がどのくらい感謝したかを、とっさのこのため英語で十分伝えることができなかった。そのことが、家に帰ってから大いに悔やまれた。牧師さんと握手して分かただけに尚更そうであった。

そこで、手紙でこの英文聖書がどうしても必要であったのか、私が授業で何を指しておりこれをどう活用するのか、そして何よりこうした好意に対して、私の心からの感謝の気持ちを伝えねばならないと考えた。

相当時間^{すなわ}をかけ、上記の内容を一通は英文で、もう一通は同一内容を日本語で作成した。日本語のは読み易いように漢字に送り仮名をつけたり、難解な文には脚注に一部解説を付け加えたりした。こうした、一見非常識にも思えることをした。それは、日本語を一定話すことのできる牧師さんだったので、私が牧師さんの立場ならこうしたことをされると大変助かると考えたからである。だから、多少時間がかかっても私の感謝を伝える上でこれが一番誠意ある態度と考えた。

このとき、ひらめいたことがあった。文章を書くということは、きれいな文や飾った文等を書くことではなくて、自分の素直な気持ちを伝えられるよう最大限の努力をすることではな^{かな}ろうか、と考えた。即ち自分の想いや心を伝えるということである。だから、文章とは、当然肝心の心や想いが澄んでいなければ全く意味のないことであり、そのことも文章を書く上で不可欠のことであるとも感じた。

同時に、このとき英語の勉強や授業もこれと同一ではなかろうかと考えた。だから、少々の英語の間違いよりも、自分が相手のことを真剣に考え、相手に自分の想いや心を伝えることが大事であり、そのための最大限の努力をすることが一番肝腎なことではないか、と考えるようになった。

繰り返すが、双方の間に文章以前に心が存在しなければならないということである。英文解釈でも同様ではなかろうか。文書の中に何らかの心を見いださねばならず、そして解釈の中に自分の存在を見いださねばならぬ。それに値しない英文もあるというかもしれないが、それらを生徒・学生に読ます気は私には毛頭ない。英作文でも同様であろう。まず大切なことは文章以前に自分の心がそこに存在すること、そして、その心を、さらには自分を、再び心を通して伝えることが重要ではなかろうか。多少の英語の誤りなどは——ないにこしたことはないが——あったとしてもそれらに比べればいかにほどの意味を持つであろうか。第4節の最後の資料－1に掲載した野口英世の母の手紙を読めば、私の言おうとしていることは分かるであろう。

こうした中で、ヘレンケラーの文章を読んでいたとき、これらのことを再度確認すると同時にヘレンケラーの再発見となった次第である。そして、このテキスト第Ⅲ部「こころ」のスタート

となった。尚、偶然かあるいは潜在的にそうした内容に昔から私が引きつけられていたのかどうか知らないが、８章シュバイツァー・９章キング・１０章チャップリンの内容も——当時意識していなかったにもかかわらず——この「こころ」にとって不可欠な内容のため、第Ⅲ部のタイトルを「HEART」（授業に“心”を求めて）としてまとめることにした。

尚、私が教え始めてから、特にこの短大創設時から今日までの、生徒に想うこと及び今後の授業について思うことを補章一３に書いているので参照してもらいたい。

(2022/02/08追記)

休眠期＝躁鬱病（うつ）の鬱（うつ）の方の可能性が高い。病気原因は、ポリテクカレッジ岡山の労基法違反・契約違反被害と、外部からの偽学生の乱入による可能性が高い。詳細は補章で記す。